

自然共生社会の実現に向けて～生物多様性への対応

基本的な考え方

2024年6月、日立建機グループは生物多様性方針を策定し、生物多様性に対する「向き合い方」を整理しました。本方針のグループ内外への浸透を進めるとともに、取り組みおよび開示の深化を進めています。

本方針を踏まえ、2024年10月、日立建機は環境省が推進する「生物多様性のための30by30アライアンス」に参画しました。30by30とは、生態系サービスの劣化を止め、2030年までに陸と海の30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする目標のことで、2021年6月の英国G7サミットで合意されたものです。日本国内で発足した同アライアンスの考え方が、サーキュラーエコノミーの実現やお客さまの課題であるカーボンニュートラル対応に挑む当社の姿勢と重なりと判断し、賛同することとしました。

今後は30by30アライアンスなどの社外動向の変化も踏まえつつ、生物多様性保全に向けた取り組みを日立建機グループ全体で進めていきます。



日立建機グループ生物多様性方針

<https://www.hitachicm.com/global/ja/sustainability/environment/nature/>

土浦工場における生物多様性調査

日立建機グループ生物多様性方針の中で、「事業と生物多様性との関わりを把握し、影響がある場合は低減をめざす」と明記していま

調査結果から見てきた現状と留意点

	自然の状態	留意点
調整池	・敷地内への降雨が水源。水質は良好 ・池岸の斜面はエノキ等の落葉樹、トウネズミモチ等の常緑樹、スギ等の混交林。テンの糞を確認。タヌキ、ハクビシン、アライグマの生息も確認 ・池でマガモ(100羽超)、コガモ(30羽超)が越冬。カルガモも多数確認 ・水生生物はモツゴ、ガムシ類を確認	・水質は水環境に悪影響を及ぼしていない ・浅瀬に水生植物がない点は生物多様性にとってマイナス。ただし、浮葉植物があるため、イトトンボ類などの水草を好む種が生息し、保全上の価値あり ・浮葉植物は外来種の可能性があり、注意が必要 ・コイやアメリカザリガニなどの侵略的外来種の存在は課題
雑木林	・コナラやエノキなど在地樹木が中心。かつての雑木林に近い植生が残存 ・メジロ、シジュウカラ、キジバト、シロハラ、アカハラ、ツグミなどを確認 ・エノキの大木が複数あるため、幼虫がエノキの葉を食べるオオムラサキやゴマダチョウ、カブトムシなどの森林性昆虫が生息している可能性あり	・コナラなど落葉樹の後継木がなく、常緑樹が成長しているため、10～20年で常緑樹の森へと移行する可能性あり ・常緑樹が優占する樹林になると、オオムラサキをはじめ雑木林の明るい環境を好む種は姿を消すリスクあり ・常緑樹やモウソウチクの伐採、またコナラ等の後継木を育てるための大径木の伐採、落葉かきなど、明るい落葉樹主体の森を守るための維持管理を行うことが今後の課題

今後の取り組みにおける方向性

今回の調査結果からは、土浦工場内の調整池および雑木林は、工場内であるにもかかわらず里山的な自然が残され、絶滅危惧種をはじめとした多様な在来種が生息する可能性が高いと考えられるため、環境省「自然共生サイト[※]」に認定される価値を備えていると判断されました。

調整池では集中豪雨などで水があふれるリスクがあることも考慮し、生物多様性の視点も踏まえた池底の土砂除去、雑木林では良好な状態で保存されてきた現状を若返らせる更新管理が必要との指摘がなされました。

す。2025年3月、土浦工場における生態系がどのような状態で保存されているか、周辺環境に対してどのような影響をもたらしているかなどの現状把握を目的とし、関係各部門による協力のもと、外部専門家とともに生物多様性調査を初めて実施しました。

調査結果からは、当社が事業を行う上でさまざまな環境的配慮を創業以来実践してきたことが証明されました。今回のような調査を重ねることで現状を正確に把握し、生物多様性対応に関するアクションプランの策定などの施策を検討していく予定です。

※ 自然共生サイト：ネイチャーボジティブの実現に向け、企業の森や里地里山、都市の緑地など「民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている区域」を「自然共生サイト」として認定する取り組み

